

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの50年-』No.12

今週のキーワード! 首相訪印

日印関係の基礎

ここに内閣総理大臣池田勇人と印刷された一枚の名刺があります(写真参照)。『インド私録』にあるようにやや大型の名刺は半世紀もの時を経て変色こそしているものの、池田首相自らが認めた文言は、短いながら一国の総理としての風格とともに訪印の際の興奮冷めやらずといった雰囲気漂っています。

残念ながら、池田首相の1961年9月の訪印後、日本のインドに対する関心は低下し、日本の首相の訪印はその後約四半世紀の間途絶えることとなります。



池田勇人首相からいただいた名刺。「御礼」と「在インド大使館 武藤理事長殿」は池田首相の真筆。縦69mm×横55mmは普通の名刺より一回り大きい。(武藤友治氏所蔵)

この空白を1984年5月、四半世紀ぶりの首相訪印で打ち破ったのが中曽根康弘首相でした。同年10月のインディラ・ガンディー首相の訃報には葬儀参列を即決、インドに日本を強く印象付けたとして武藤氏はその首相としての決断力を評価しています。

色々な評価はありますが、この決断において首相の器というものが感じられます。

その後日印外交はインドの核実験実施と経済制裁などで一時停滞したものの、2005年の小泉純一郎首相の訪印から毎年相互の首相訪問行われています。

ここ数年でインドは巨大な市場かつ製造拠点として世界の関心の的となり、各国の対印外交も熱を帯びています。日本でもインドへの関心は高まっていますが、各国に比べて後手を踏んでいる印象も拭えません。このことについて武藤氏は第4回放送で、首相の相互訪問が途絶えていたように政治的な関係を深める努力がなされなかったことを一因に挙げています。

もし、日本が政治面での日印関係を緊密にできていたなら、武藤氏が指摘するように、昨年12月の鳩山前首相の訪印時には、ムンバイになぞ寄り道せず、堂々と

首都デリーからインドに乗り込むという戦略が採られたことでしょうか。首相は国の顔。世界から侮られることのないよう、国民が恥づかしくない佇まいでいてほしいものです。

朗読者ご紹介

声格! 海老原薫さん

朗読者ご紹介の3人目は海老原薫さんです。2人のティーンエイジャーの母である海老原さんは、私、加藤が某投資信託会社に新社会人として入ったときに同じ課に配属された同期でした。今回朗読をお願いしたのは、鈴を転がすような声の持ち主である上に、学生時代は視覚障害者の方のための鍼灸の教科書の朗読ボランティアをしていたと聞いていたからです。

それにまた、一緒に働いていた頃の正確無比、「よいよ!」と一言請け合ったならば、任せて安心の仕事振りも記憶に刻まれていました。

朗読については、さらに極めるべく子育ての合間にNHKの講座にも通っていたとのこと。引き受けるに当たっては腹筋も鍛えたと聞きました。こういうところ、少しも変わっていませんでした。

第14回放送は
8月31日です。

